

大学生に対する情報教育の実践 ～新聞の特性を考察させる授業について～

園 屋 高 志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Practical Reports on Information Education for College Students ～About the Class to Study the Characteristic of the Newspaper～

SONOYA Takashi

キーワード：情報教育、大学教育、新聞、情報活用能力

1. はじめに

現代の情報社会においては、個人の資質として情報活用能力が有用であり、現在学校教育においては、その育成を目的とした情報教育が展開されている。改めていうまでもなく、情報活用能力は「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」¹⁾であり、それを育てる教育が情報教育である。従来から情報活用能力の必要性は言われていたが、1998年に情報教育の目標が「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の三つに明確化され²⁾、現行の学習指導要領で小学校から高校までの体系的な情報教育が打ち出されている。筆者はこれまでに、情報教育は小学校、中学校、高校に限らず大学でも必要であることを述べ、その実践を試み、その方法、内容、評価結果等を既に報告してきた³⁾⁴⁾⁵⁾。

筆者はその後も大学における情報教育の研究を継続して行っており、特に新聞に関心を持たせ、その特性を考察させる授業の在り方を研究しているところである。本稿では、その実践研究の途中経過として、最近行った授業実践について報告する。

ところで、筆者が大学における情報教育を実践するにあたって、目標として設定した情報活用能力は、既に述べたように特に次の4点である⁶⁾。

①【情報の収集能力】……多くの情報の中から必要な情報を収集する能力

身の回りには様々なメディアが存在するが、その中から適切なメディアを選択すると

共に、そのメディアを活かして、自分の求める情報を得る能力を身につける。

②【情報の判断能力】……情報が適切なものであるかを見極める力

たとえば新聞やテレビの情報は、人の手を介して伝えられている、つまり発信者の意図が入っているの、鵜呑みにしてはいけないことを理解する。また、インターネット上で検索すると多くの情報が得られるが、その中から得られる情報の真偽を見極める力も必要である。

③【情報の発信能力】……自分の考えをわかりやすく表現して相手に伝える力

国際理解のため、あるいは共生社会に生きるためには、人間同士のコミュニケーションが大切となる。そのためには、相手の話を聞く能力だけでなく、自分の考えをわかりやすく表現して相手に伝える、情報の発信能力が必要となる。

④【情報モラル】……情報を扱う際のマナーやモラル

これは上述の①②③に関わることであるが、情報活用を行う際には、著作権、プライバシー、有害情報、電子メールのマナー等、種々配慮すべきことがある。それを知り、マナーやモラルを身に付けておく必要がある。

上述の4点は3年前に述べたものであるが、それ以降今日に至るまでに、情報社会はさらに進展し、これらの能力や態度がますます要求されるようになっていく。特に、インターネットの普及に

伴い、筆者は①②④の必要性を痛感している。

本稿では上述のうち①②に関わる授業実践、とりわけメディアの一つとして新聞に着目した事例を述べるものである。

2. 新聞利用の実態

2-1 新聞(紙媒体)を見る実態

筆者は新聞の利用に関して、従来から大学生に次のことを尋ねて調査している。

「Q. あなたは、新聞を見ていますか? あなたの現状を平均的に考えて、つぎのうち該当するものに○をしなさい。」

この回答結果を図1に示す。同図は2001年度までの調査結果⁷⁾に、2005年度の調査結果を付加したものである。1990年度から2001年度までの11年間に「毎日見る」者は減り、逆に「まったく見ない」者が増えていることは先に指摘した通りである。2005年度の調査では、回答者数が60名と少ないので、単純に比較はできないが、「毎日見る」者はほぼ変わらず、30%であった。

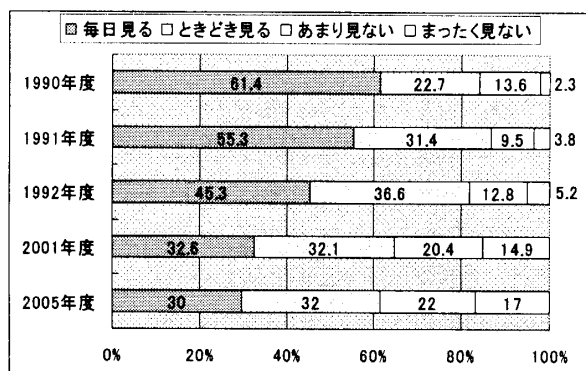


図1：新聞の見方に関する調査結果

回答者：1990年度～1992年度はB大学で、それぞれ88名、105名、172名、2001年度はA大学とB大学で221名、2005年度はA大学60名である。なお、1990年度～1992年度は選択肢の「あまり見ない」は「ほとんど見ない」である。

このように大学生が新聞を読まなくなったという傾向は、「情報化社会と青少年に関する調査」における、新聞の閲読時間調査からも明らかになっていることは既に述べた通りである⁸⁾。

これらの原因の一つは、情報源としてテレビが手軽であり、またインターネットが普及してきた

からであろうことは容易に想像できる。確かに、テレビは夜にその日の、日曜日には一週間のニュースをまとめた番組があるので、世の中の出來事は新聞を見なくてもおよそわかるという面はある。

しかし、単に情報の入手だけであればそれで済むかもしれないが、情報を得て「自分で考える」という意味では、新聞がよいと筆者は思う。また新聞にはニュースだけではなく、様々な内容の記事があり、その中から自分の意志で選択し、自分のペースで読めるのも良い点である。もちろん、新聞、テレビ、インターネット、図書等の各メディアにはそれぞれ利点、欠点があるわけで、それらを知って使い分けていくことが、前述の「情報の収集能力」「情報の判断能力」に該当する。そのために、新聞を読まないで、すなわち新聞の利点を知らずにテレビやインターネット等の他のメディアに向かうのではなく、新聞の利点も知った上で他のメディアに接してほしい、というのが筆者が授業で新聞を取り上げる意図である。

ところで、2005年度の調査では日頃の生活形態と新聞の見方の関連を調べた。というのは、新聞は購読するか、閲覧できるところに行かないと読めないの、家族と一緒に生活しているかどうか、見方に影響すると思われるからである。調査では、「家族と一緒に生活」か「それ以外(家族とは別に一人で生活、その他)」を尋ねて比較した。

その結果、「毎日見る」「ときどき見る」「あまり見ない」「まったく見ない」の割合が、「家族と一緒に生活」している者は、それぞれ48%、26%、19%、6%で、一方、「それ以外」の者は、10%、38%、24%、28%であった。すなわち「家族と一緒に生活」している者の方が「毎日見る」という割合が高く、上述の予想通りであった。

2-2 ホームページ上でのニュース等の閲覧

2005年度の調査では、さらにインターネット上でニュース等を閲覧することについても調査した。すなわち、インターネット上に新聞社や放送局のホームページがあり、そこでは最新のニュースや話題などを閲覧することができる。また、

ポータルサイト、検索サイト（YAHOO, MSNほか）でもそれらを閲覧できる。そこで、それらをホームページで見ることにについて、通常の新聞（紙の形の）と同様に質問した。

その結果、図2に示したように、「毎日見る」「ときどき見る」「あまり見ない」「まったく見ない」の割合が、22%、43%、13%、22%であった。筆者は「毎日見る」者がもっと多いのではないかと予想していたが、そうではなかった。ホームページを手軽に閲覧できる環境には、筆者が考えるほどはまだないのかもしれない。なお、同図には通常の新聞を見ること（図1に掲載済み）も併せて掲載したが、ホームページを見ることとの関連は特に見られなかった。

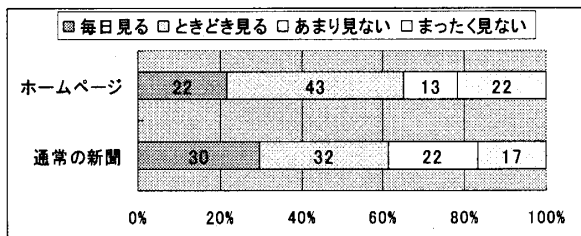


図2：ホームページでニュース等を閲覧すること
※この図には、「通常の新聞」についても併記した。

3. 新聞の特性を考察させる授業実践

3-1 これまでの新聞利用の実践

新聞に関心を持たせ、新聞の特性に気づかせるために、これまでに筆者が行っている実践は大別して次の二つであった。

(1) 授業の中で新聞記事を配布する。

これは、「教育工学」(A大学)の授業の中で、毎回その授業前の概ね2週間くらいに筆者が関心を持った記事を切り抜いて印刷・配布するという実践である。その記事の内容は、教育関係に限らず幅広い分野にわたるように留意した。この結果は、受講者によれば、いろいろな分野のことができてよいか、自分も新聞を見てみようと思ったなど、毎年好評である。

(2) 二つの新聞記事を比較させる。

これは二つの授業(A大学「情報メディア論I」およびB大学「教育メディア論」)で次のような演習をレポート課題の形でさせたものである。

「ある一つのニュース、出来事、話題等について、2種類の新聞がそれぞれどのように扱っているかを調べ、その相違点を述べなさい。さらにそれをもとに新聞という一つのメディアの特性を述べなさい。(解答書式は省略)」

この演習課題の意図は、新聞等のメディアからの情報は発信者の意図が入っており、そのまま鵜呑みにしてはいけないことに気付かせること、すなわち前述の「②【情報の判断能力】」を培うものである。この詳細については、既に報告⁹⁾しているのでここでは省くが、受講者からは「同じ内容でも新聞によって書き方が異なることに初めて気づいた」「二つの新聞の書き方が異なっていることに驚いた」「新聞記事は、書く側の意図が入っているのだと思った」「新聞記事は、そのまま鵜呑みにしない方がいいと思った」「二つ以上の新聞を見比べてみるのが大切だと思った」等の感想が出されており、筆者の意図が達成されたことが明らかになっている。

3-2 今回の新聞利用の実践

3-2-1 実践の内容

ここでは2005年度に新たに行った実践について述べる。

「教育工学」(B大学、受講者27名)の授業において、新聞に関して次のような課題を与えて演習させた。当該授業は集中講義形式で行ったので、この演習は2時限連続で行った。この課題の意図は、新聞の特性を考えさせることであるが、特にグループで話し合い、その後発表という演習形式にしたのは、自分だけの考えではなく他者の様々な考えに気づいてほしいためである。

【課題】次の課題について、以下に示したような方法でグループで演習し、発表しなさい。

この講義の中で、新聞を読む大学生が減りつつある傾向を提示した。また、それは中学生でも同様であることを示した。

そこで、あなたは、新聞をできるだけ利用してほしいという立場に立って、新聞と他のメディアをどのように使い分ければよいか、その具体的方法を考えなさい。この場合の「新聞」は、イン

ターネット上の新聞社の記事ではなく、紙の形の通常の「新聞」を指している。たとえば、次のようなことである。

- (1) ***はテレビから情報を得ればよいが、○○○は新聞から情報を得た方がよい。
- (2) ***はインターネットでもいいのだが、新聞の方が△△△という利点があるので、新聞を利用した方がよい。
- (3) ***については新聞の方が優れているので、是非新聞を利用したい。
- (4) 毎日新聞を読む習慣がつくと、***というようなよい点が生じる。

このようなことをできるだけ多く列挙しなさい。

【方法】

- (1) グループで演習する。1グループは3～4名で、指定されたメンバーとする。全部で8グループである。
- (2) 1グループに新聞を1部配布するので、それを見ながら、メンバーで話し合っ考える。(注：新聞は演習前日の4社の朝刊を用いた)
- (3) 話し合っまとめたことを、グループごとにOHPで発表する。
- (4) 発表時間は1グループ5分程度とする。順番は名簿に示したグループの最初の方からとする。

3-2-2 実践の結果

(1) 受講者の回答

グループごとの話し合いの後、発表はグループごとに行われたが、発表された回答を筆者が整理した結果、次のように10カテゴリーに分類できた。

- ①情報が詳細、多様であること
- ②情報が一覧できること、まとまっていること
- ③情報に信頼性、客観性があること
- ④説明がわかりやすいこと
- ⑤地域の情報が得られること
- ⑥手軽に利用できること (いつでも、どこでも、だれでも利用できること)

- ⑦保存が容易なこと
- ⑧自分が関心を持った情報だけを見られること
- ⑨読解力等の国語力を習得できること
- ⑩その他

これらのカテゴリーが受講者のとらえた新聞の特性ということになる。しかし、それらの中には必ずしも新聞だけの特性ではない項目もある。また、各回答を見ると新聞だけに該当しないものもあるが、学生がどのように新聞をとらえているかを知る意味で、あえて原文のまま掲載しておく。以下はそのカテゴリーごとに回答を列挙したものである。

①情報が詳細、多様であること。

- 1.1 テレビより新聞の方が詳細な情報を得ることができる。
- 1.2 内容(概要)は、テレビからでも得ることができるが、新聞の方が詳しく知ることができる。
- 1.3 情報量が一つの新聞で多い。
- 1.4 様々なトピックがあるためいろいろな知識を得ることが可能
- 1.5 新聞なら、テレビ・政治・外交など、様々なトピックを一度に調べることが可能
- 1.6 一つでさまざまな情報(天気・イベントなど)を知ることができる。
- 1.7 求人・広告・個人の依頼情報まで記載されている。
- 1.8 ニュースで放送されない内容も掲載されている。

②情報が一覧できること、まとまっていること

- 2.1 新聞はいつべんに様々な情報を見れる。
- 2.2 テレビ、映画、株などの情報が一覧で見れる。
- 2.3 調べたい情報以外の記事が手に入る。
- 2.4 インターネットは、情報量が多く、正しい情報の判断がつきにくい、新聞ならば、まとまっており、情報に正確さがある。

③情報に信頼性、客観性があること

- 3.1 新聞は記事の最後に誰が書いたのか、発信者が明確で信憑性がある。
- 3.2 意見が含まれず、ありのままの現実を主体とした記載により、正しい情報を得られる。

- 3.3 インターネットよりも文字の方が信頼性がある。
 - 3.4 新聞は、訂正が困難な為、責任のある情報が公開される。
 - 3.5 パソコンだと、個人のホームページなどは主観的になりがちだけど、新聞は周りの意見なども含め、客観的な情報である。
 - 3.6 テレビ番組等ではコメンテーターの意見や感情などが入るが、新聞は客観的で事実をそのまま知るには良い。
 - 3.7 記事に編集者の気持ちが込められているので読者の心をつかむ。
- ④説明がわかりやすいこと
- 4.1 見出しを読めば分かる。説明が分かりやすい。
 - 4.2 情報が文章化され分かりやすく書かれており形として残る。
 - 4.3 芸能関係の情報はテレビでもよいが政治・経済関係の詳細は新聞の方が分かりやすい。
- ⑤地域の情報が得られること
- 5.1 県内のニュースが新聞は多い。
 - 5.2 新聞の方が地方の情報を詳しく知ることができる。
 - 5.3 スポーツに関するニュースはテレビの方が分かりやすいが、地方のニュースに関しては新聞の方が詳しく書いてあるので理解しやすい。
 - 5.4 世間の情報だけではなく、地域の情報も掲載されているので、地域密着していると言える。
 - 5.5 地域ごとの情報が詳しく載っている。
 - 5.6 地方新聞では、小さな身近な事件や事故も取り扱っている。
 - 5.7 地方の情報は、地方欄を活用できる。
- ⑥手軽に利用できること（いつでも、どこでも、だれでも利用できること）
- 6.1 新聞なら、持ってさえすればいつでもすぐに調べることが可能
 - 6.2 テレビの放映時間は限られているが新聞は時間に拘束されることなく情報を得ることができる。
 - 6.3 テレビは時間帯が決まっているが、新聞は時間を選ばない。
 - 6.4 いつでもどこでも様々な情報を得ることができる。
 - 6.5 新聞は、場所も時間も選ばず読める。
 - 6.6 新聞は、持ち運びできるので、場所に関係なく情報を得ることができる。（同じ記述が4件あり）
 - 6.7 新聞は、何度も読み返すことができる。（同じ記述が4件あり）
 - 6.8 新聞はどんな条件であっても見れるが、インターネットなどは条件がある。
 - 6.9 パソコンだと、使い方が分からないと見れないけど、新聞なら誰でもみることができる。
 - 6.10 パソコンは知識が必要だが、新聞は必要なく簡単に読める。
- ⑦保存が容易なこと
- 7.1 スクラップしやすい。
 - 7.2 保存可能なため、いつどんなことが起きたか分かる。
 - 7.3 活字だから頭に残り、手元にも残る。
- ⑧自分が関心を持った情報だけを見られること
- 8.1 自分の興味を持った情報だけを知ることができる。
 - 8.2 知りたい情報を集中して見れる。
 - 8.3 メディアは受け身的なとらえ方ができるが、新聞は自発的にとらえることができる。
- ⑨読解力等の国語力を習得できること
- 9.1 毎日、新聞を読む習慣をつけると読解力はUPする。
 - 9.2 毎日新聞を読むことで、①文章構成力、②読解力、③漢字力、をつけることができる。
 - 9.3 毎日新聞を読むことで、読解力や漢字力が向上する。
 - 9.4 テレビだと字を読まず、見るだけで情報が入る→新聞だと……活字を読むし、考えながら文章を理解していくので、読解力がつく!!!また、新聞は地方の事など、身近な情報も得られる。
 - 9.5 文章力、言葉の表現力、言い回しなど学習できる。
 - 9.6 毎日、新聞を読むと活字に強くなり正しい

日本語の使い方が身に付く。

- 9.7 漢字や文章の構成の勉強になる。
- 9.8 新聞を読む習慣がつくと速読や漢字能力があがる。
- 9.9 分からなかったら、意味を調べようと思える。

⑩その他

- 10.1 コラムとか社説が受験で取り扱われることが多い。
- 10.2 新聞はリサイクルできる。

このように、受講者は新聞の特性について多方面から考えているように思われる。ただ、先に述べたように、必ずしも新聞だけの特性ではない項目もある。たとえば「⑤地域の情報が得られる」については、テレビでも番組によってはそれが得られるわけである。また、「⑨読解力等の国語力を習得できること」は、新聞だけではなく、図書等の活字メディア一般に言えることであろう。ただ、同じ活字メディアでも、図書に比べて新聞は身近で手軽に接しやすいという利点があるから、このような項目が出されるのであろう。

一方、「③情報に信頼性、客観性があること」については、3.6と3.7のように反対の意味のものもある。この信頼性、客観性は、我々が新聞からの情報をどのように読み取るかという、情報の収集、判断に関わる重要な点であるので、さらに考察を深める必要があったと思われる。その際たとえば、「基本的には記事に客観性はない。どんなに「公平・中立」な立場をとろうとしても、どうしても主観は入り込むのである。」という指摘と事例¹⁰⁾を紹介するなどして、さらに考えさせて意見を交換させるなどの手だてが有用であろう。

さらに、この課題では「新聞と他のメディアの使い分ける方法」を求めているが、演習の結果出された回答は、上述のように新聞の良さだけを述べたものが多かった。これは筆者の例示の仕方によっての面があり、この点は今後の実践では改善したいと考える。

(2) 受講者の感想

この演習課題に対し、受講者から次のような感

想が出されていた。

1) 新聞の利便性を改めて考えることにより、テレビでは得ることのできない点に多く気づくことができ、情報化が進む中でなぜ紙媒体である新聞が今もなお必要性がいわれるのかに気づくことができた。

2) 新聞は日頃とても身近にあるものだけど、改めて新聞の利点について考えてみると思ったよりも多く、新聞を読むことの大切さに気付いた。新聞ならではの魅力を改めて実感した。

3) 改めて新聞の良さを見つけることは、意外と大変だった。普段からテレビ、インターネット、新聞を使い分けて情報を得ているわけではなく、ただばくぜんとしているからだと思った。他の班の発表により、自分たちでは気づかなかった新聞の利点を知ることができてよかったと思う。

4) 演習を行ってみて、新聞について考えてみたのは初めてでした。新聞のいい所、利点はとても多く、新聞を見ることが減っている私は改めて新聞を読むようにしたいと思いました。パソコンが普及して、インターネットですべてが済む時代になってきましたが、もう一度新聞のよさを見直すことができてよかったです。

5) 新聞には新聞の長所・短所、インターネットにはインターネットの長所・短所がある。それを上手に使い分け、活用していくことがこれからの情報化社会には必要なことだろうと、この演習を通して考えさせられた。

このような感想を読んで筆者が改めて気づいたことは、受講者がこれまでに新聞の利点・欠点を考えたことがなかったこと、すなわち、新聞という一つのメディアについて学習したことが無かったということである。それだけに、新聞の特性を考えさせるという筆者の意図そのものは必然性があったといえるし、そしてまたその意図が概ね達成されたことが、上述の回答や感想から明らかになった。今後の実践では発表後の話し合いや、新聞に関する文献の紹介などを取り入れて考察をさらに深めるようにしたいと考えている。

4. おわりに

本報告では、大学における情報教育の中で、新聞の特性について考えさせる授業の実践について述べた。

教育における新聞の利用では、周知のようにNIE (Newspaper in Education) という活動がある。鹿児島県においてもNIE研究会によって推進され¹¹⁾、2005年8月には鹿児島市でその全国大会が行われ、小・中・高校での実践例が報告されている¹²⁾。

その中に、「新聞に親しむと言うが、まずは新聞を知ることが肝心」「高校生が新聞を読まない理由の一つに新聞自体をよく知らないことを挙げ」という指摘がある。この点は筆者が本文中に述べたように、大学生についても同様であり、とにかく新聞の特性について考え、新聞を知る機会を設けることに意を強くした次第である。

全国大会で報告されたNIEの実践例では、教材の一つとして新聞記事を用いることで、その教科の目標を達成させると共に、併せて、新聞に親しんだり、批判的な読解力を養ったり、表現力や語彙力を向上させたりしている。これは、新聞を利用した授業が情報活用能力を育てる情報教育としても位置付けていることを示している。このことは、新聞に限らずテレビ、コンピュータ、インターネット等のメディアを教科の目標達成の手段として利用した場合も同様である。その授業を情報教育になし得るかは、授業者がそれらのメディアを利用しながら、どれだけ「情報活用能力の育成」を意識するかによっている。そのことを小・中・高校の現場に期待したい。

さらに、新聞を通して情報活用能力を養うためには、生徒が新聞づくりを経験し、新聞を制作する側、すなわち「情報の送り手」になってみることも必要である。これは上述のNIE大会の報告や文献¹³⁾でも述べられている通りである。筆者の授業でそれをどのように取り入れるかを含めて、今後も大学での情報教育の実践的研究を重ねていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 臨教審だより、1986年1月臨時増刊、第一法規、p. 95
- 2) 情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて(情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 最終報告)、1998年8月答申
- 3) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の評価、鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編、第45巻、1994年3月、pp. 269-276
- 4) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の課題(2)～新聞への関心を高める手だてについて～、日本教育工学会第11回大会講演論文集、1995年11月、pp. 519-520
- 5) 園屋高志：大学生に対する情報教育の内容と方法に関する実践的研究、鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編、第54巻、2003年3月、pp. 205-217
- 6) 5)と同じ文献のp. 208
- 7) 5)と同じ文献のp. 214
- 8) 5)と同じ文献のpp. 214-215
- 9) 5)と同じ文献のpp. 211-213
- 10) 北村肇：新聞記事が「わかる」技術、講談社、2003年8月、pp. 95-100
- 11) NIE2004年度報告書、鹿児島県NIE研究会、2005年5月
- 12) 南日本新聞、2005年7月29日、30日、いずれも16～17面
- 13) 鈴木伸男：こうすればできるNIE、白順社、2002年10月、pp. 272-273